

『シロツメクサを触ってみたら』 0歳児 5月

エピソード

天気の良い日は園庭に出て、クローバーの花畑で腹ばいになって草花に触って遊んでいます。

この日は前日の雨で花畑が湿っていたため、ベビーカーに乗って外気浴をしながら花畑へ行きました。シロツメクサを手渡すと、両手でギュッと握り、引っ張って遊ぶ姿がありました。たまたま花がとれ、とれるたびに保育者は繰り返し何度も手渡しました。すると、シロツメクサを受け取ろうとした時に花の存在に気が付いて、花をつまもうと親指と人差し指が出ました。片手でしっかりと茎を握って、花の部分をじっと見ながら、もう片方の指で花を触っていました。再び引っ張って遊ぶうちに、花の部分がとれたので、保育者が「とれちゃったね」と声をかけると、声を出して笑っていました。



子どもの育ちや学び

繰り返しシロツメクサを引っ張って遊ぶ中で、長い茎の先にある小さな花に気が付きました。“この小さなものは何だろう” “触ってみたい”と、0歳児なりの気付きや思いから親指と人差し指が出たのだと思います。最後には、花がとれたことにも気付き、保育者の「とれちゃったね」という言葉にも反応して、おもしろさを感じられました。

保育者の思い

自然物に触れ、草花の柔らかい感触や匂いを感じて欲しいという思いがあり、花畑で遊んでいます。ベビーカーの中でも、いつもと同じように草花に触って欲しくて、保育者はシロツメクサを手渡しました。口の中に入れてないように注意を払いながらも、どのようにして触るのかなと思い、見守ることを大事にしました。また、繰り返し遊んで欲しいという思いから、花が取れたことを区切りに、新しいシロツメクサを手渡したり、子どもが花の存在に気付いた姿に、花がとれた時の面白さを一緒に楽しむようにしました。



家庭だったら・・・

- ・シロツメクサやタンポポなどの身近な草花を一本手渡して、同じ遊びができます。口の中に入れて確かめようとする年齢であるので、目を離さないようにします。
- ・「あう、あう」などの喃語発した時は、喃語に答えていくと、やりとりが楽しめるかもしれません。保護者だからこそ気付く、子どものしぐさがあるかもしれませんね。